

祈願の旅

千葉 覚

前号に旅の記「十六夜日記」をあげてみたが、その阿仏の旅とほぼ同じ頃（阿仏は弘安二年一二七九に下向）鎌倉へ向かった一人の老女がいる（建治年間か一二七五—一二七七）。年齢は、阿仏より十歳程年長と思われるが、

この旅の時、六十も後半になろうかと考えられ、兩人とも老齡を押ししての旅である。この老女の名はいわゆる実材卿母で、彼女の家集が「権中納言実材卿母集」の名称で伝わっており、編年体で綴られた上巻にこの時の旅の歌がまとめられている。

実材卿母は白拍子の出身。時の権力者西園寺公経の寵愛を受け、実材、大納言二品の一男一女を儲けている。それ以前（または前後して）かは不明だが、平親清の愛も受け一男五女の子女がいる。親清の詳細はわからないがこの実材卿母集をみると屢々京と関東との間

を歩き来している。関東申次の要職に就いている西園寺家の家司として幕府との連絡のため何度か鎌倉へ向かったのであろうか。

ともかくそれに実材卿母も同行したことがある。三二番歌の歌の詞書に（以下全て歌番号も含め「私家集大成」を使用）

（前略）かのかぎりのたひの姫君（注大納言二品、たいりへ御にるまいるの夜しも、心ならずあつまへくたりしほと、御なこり、ひとかたならぬ心地して、かなしともをろかなり

とあり、おそらく親清と下ったのであろう。その親清亡き後

ひととせの秋、はまなのはしのうへにて、おもふとち月見し事、思ひいてられて
211 たひのそら月にのひれるおもかけを はまなのはしに恋わたるかな

「おもふとち」とは親清と実材卿母をさす。（注親清が死去した）おなしとしの神な月のころ、あつまへくたり侍りに、むかしの人、かきりのたひやとり侍けるいゑを見ればへりし、いとあはれにて
199 いくかへりゆきとまりけんあつまちのかきりのたひのやとそかなしき

つまり前に述べた建治年間と思われる下向だけでなく、それ以前に何度か関東へ旅しているわけで、殊にこの建治年間の旅の記が詳しいのである。

おもふ事侍りしころ、あつまのかたへおもひたち侍りに

203 うしとのみ思たちぬるたひころも きてはうらみの日数へたつな

の歌から始まり

おなじみな月のすゑつかた、むかしすみなれ侍しふるさにとちかへりたりしほど、いとあはれなる事おほくて

223 ふるさとにめぐりあひぬる月のみや 見しよのかけもかはらさるらん

224 心あらはなれもむかしやおもひいつるいはねにのこる松かけのみつ

225 みくさるてうつもれにける池水も いまそちとせのかけはずむへき

で終えている。総数三首から成つているがこの旅の動機はいかなるものであつたらうか。

むかし、このなるみかたをとり侍りし
事、思ひいられて

205 たひ衣きしはむかしになるみかた　みちひ
るしほにぬる、袖かな

むかしの人、いくたひ此みちを行かへり

けんと思ふも、いとかなうて

209 こゝろあらはとはましものをあつまぢや
いくたひわけしのへのさ、原

そして先程掲げた二二―番歌また二二三―
二二五番歌等から考えられるようにこの旅は
亡き夫親清を偲ぶ追憶の旅であつたと思われ
る。老齢を押しての旅だが亡き夫との縁の地
を尋ね、「おもふ事(旅の冒頭歌の詞書)(心配
事)を忘れさせてくれる懐しい旅であつた
のだらう。

「旅は生命を若がえさせる」といった内容
のことをデンマークの童話作家アンデルセン
が語っているが、実材卿母も思ひ出の地、名
所・旧跡を旅して豊かな詩魂そして生命を蘇
らせたであらう。

しかし、しかしである。どうも以上のよう
に簡単には片付けられない所がある。

あしの海のいり江にしけれるあしのねさ

しも、いとおかし、はこねのをやまをふ
しおかみたてまつるにも、思ふこと侍り
て

222 みたらるにおひはしめけるよしあしのも
とのねさしは神そしるらん

この歌は一体何を意味するのか。三島神社
では

221 いくくにおおなしみしまの神なれば　たの
み、ことにかくるゆふして

特に頼みとする所がある。田子の浦では

217 はるはるとおひのなみちにたちいて、　か
ひあるうらをみるよしもがな

と老齢を押してのこの旅が甲斐のあるもの
であつてほしいと願っている。前掲の二二五

番歌は鎌倉(おそらくそうであらう)に到着
して「池水もいませそちとせのかけはすむへき」
と何らかの問題において明確に白黒の決着が
つくことを強く期待している表現がみられる。

とすると「おもふ事」とは実は訴訟にまで
発展する何らかの問題を指しているのではな
いか。二〇三番歌に「うらみの日数へたつな」
とあるように恨み事を早く晴らしたいのであ
る。

阿仏は幕府に直接土地問題の訴訟をおこす
べく赴いた旅である。実材卿母も阿仏のよう

な問題を抱えての旅立ちではなかつたか。

阿仏は熱田神宮で訴訟の成就を願う歌を奉
納するが実材卿母も

204 おもふことなるみのうらの神かきに　たの
みをかくるなみのしらゆふ

と「おもふこと」の成就を願っているの
である。

この時、寵愛を受けた公経は遙か昔にこの
世を去っており、また実氏・公相と西園寺家
の頭もはや亡くなつており、さらに頼りとなつ
た親清も亡き後、土地所有の問題が起り、
縁のある幕府に直接訴えるため決意した旅で
はないか。この旅の歌の直後に長女の死を悼
む歌が続くが、その詞書に

やよひのころ、あねむすめなくなりにつ
るよしき、侍りしかは、ちかころかたみ
にうらむる事の侍りしかも、みなわすら
れて、かなしともいはんかたなし

とわざわざ互いに恨み合う程の問題があつ
たと記している点、右に述べた土地所有問題
とは直接関係はないかもしれないが、もしか
して長女との間に鎌倉へ赴かせる程こじれて
いた問題があつたかもしれない。

亡き夫を偲んでの感傷の旅ではなく老体に
鞭打つての苦しい祈願の旅であつたようだ。